

授業の在り方を考える学校コンサルテーションの実際について

—子ども一人一人のニーズに応じた授業を展開するために—

大 崎 博 史

(教育研修情報部)

1 はじめに

本研究所では、教育相談実施機関の自己解決力の向上を推進するための支援として、学校コンサルテーションを行っている。

具体的には、教師が抱えている問題を中心に問題点を整理し、評価し、具体的な対応策を検討しながら問題解決を図ることを目的として、知識を提供したり、教師の精神的な支えになったり、新しい視点を提供したり、様々な関係機関とつながるようにネットワーキングの促進を図ったりしている。

筆者は、昨年度（平成20年度）、研究協力者や研究推進活動への指導・助言者、職員研修の講師の依頼を受けて、三つの特別支援学校と二つの地域療育センターへ定期的に出向いた。そこではコンサルタントとして、1機関あたり年に3～4回のコンサルテーションを行った。

本稿では、筆者がA特別支援学校で実際に行ってきた授業の在り方を考える学校コンサルテーションの実際について報告するとともに、昨年度のコンサルタントとしての活動を振り返る。

2 A特別支援学校でのコンサルテーションについて

A特別支援学校は、肢体不自由教育部門と知的障害教育部門を有する複数の障害種に対応した特別支援学校である。筆者は、平成15年度から今まで、1年に3～4回この学校とかかわりを持っているが、平成20年度もこの学校の肢体不自由部門の中学部ならびに高等部から研究協力の依頼を受けて、校内研究や授業に関しての学校コンサルタントとしてかかわってきた。

A特別支援学校における学校コンサルテーションのスタイルで筆者が求められていることは、学校訪問するときに、はじめにそれぞれの学部で実施されているさまざまな授業を見ることである。さまざまな授業を見た後に、放課後、学部研究会で今日の授業を担当した教師から、今日の授業に関しての説明を受ける。例えば、何故今日のような授業

を組み立てたのかとか、今日の授業での子ども達の様子はどうだったのか、授業の目標や子どもの指導に関する目標等が達成されたか、次にどのような授業を展開する予定なのか等である。そして、今日の授業についてのふり返りの説明を受けた後に筆者が求められていることは、授業に関して担当者が不安や疑問に思っていることや、授業の展開の仕方でも悩んでいること、次回の授業につながるアイデアや意見に対して授業担当者以外の教師との意見交換等も交えながら、より良い授業をつくるための意見を述べることである。

また、学部が実施する研究について、研究の推進についてのアイデアや教師が意見を出しやすいような雰囲気づくりも行い、さらには、教師が疑問に思っていることや、まだよく理解していないことについて、もし自分の知見がある場合には、教師の疑問の解決に向けてその疑問に答える役割も担っている。

以下は、昨年度、A特別支援学校の放課後の学部研究会の中で実際に話題に上げられた疑問と、それに対して筆者が述べた意見を記述し、まとめたものである。

3 実際のコンサルテーション

(1) 中学部におけるコンサルテーション

ア 1回目のコンサルテーション

○9月18日(木)

・テーマ「今日の授業について」、「学部研究について」

① 今日の授業についてのコンサルテーション

最初に、授業を見学した後、授業の担当者から「今日の授業」についての説明を受け、次の時間以降の授業の改善につなげられるような意見交換や進言を行った。以下は、学部研究会の記録に基づいて、教師から出された質問とそれに対して活発な話し合いがもたれ、筆者が答えた内容をまとめたものである。

<教科等を合わせた指導における教科的要素について>

Q：例えば、ケーキ屋さんを題材とした授業における教科的要素をどのように盛り込むか？

A：ケーキ屋さんの店員役で、お店に来た客への注文を取る（国語的要素）、ケーキを実際に作るならばケーキを実際に作る時の分量等を計る（算数的要素）等などを利用して、その子に応じた教科的な要素も授業の中に含めて考えていけると良いのではないか。

<機器等の利用とその応用について>

Q：子どもが押すことのできるジェリービーンスイッチをミキサーに接続して、結果が単純でわかりやすく得られるような工夫を行った。このあとスイッチをどのように工夫して利用すると良いのか？

A：接続する物の工夫と、もう一つはスイッチそのものへの工夫があるのではないか。接続する物の工夫については、ミキサーだけにとどまらずに、指導のねらいによって他のものもスイッチに接続しても良いのでは。スイッチそのものへの工夫については、ジェリービーンスイッチ等の様々な色を利用して、色によって得られる結果が異なるように工夫することによって、子どもが色の弁別することにもつながる学習ができるかもしれない。

<子どもが覚えたことを忘れないようにするために>

Q：係としての役割や目的があっても、途中で話しかけられると忘れてしまうこともある生徒に対してどのような指導をしていけば良いのか？

A：決まった場所や時間を決めて待ち合わせする等、場所や時間を決めて最初に対応してみると良いのでは。

Q：ことばで伝えてもすぐに忘れてしまい、記憶に残らないことがある。写真カードを用いたり、活動の様子を写真等で振り返って思い出せると良いと思っているが、覚えたことを忘れないようにするためにはどうしたら良いか？

A：ことばに頼るだけでは記憶に残らないかもしれないので、例えば、聴いたことをメモ等にとって記録し、記録したものを後でふり返ることができるように、記憶を補助するような工夫を行うと良いのでは。

<子ども一人一人の学びを促進するために>

Q：子ども一人一人の学びを促進させるためにはどのような工夫をすると良いのか？

A：子ども一人一人の知的好奇心を刺激できるような課題に着目することが必要。課題を限定せずにさまざまなことについて取り組んで、子どもの経験を積み重ねていくと良いのではないか。

Q：Aさんは自分で話すことができるが、もっと自分から発信できるようになってほしいと願っているが、どのような工夫が必要か？

A：子どもへのかかわり手が発信を待つだけではなく、最初は、発信を引き出せるような発問を考える等の工夫

をすると良いのではないか。

Q：Bさんとのコミュニケーションについてはどのように思うか？

A：Bさんは小学部の時から見ているが、コミュニケーション面でもだんだんと成長してきている。中学部に在籍していることもあり、かかわる側も中学生としての対応してあげる必要があるのではないか。

② 学部研究についてのコンサルテーション

A 特別支援学校中学部では、平成20年度は「一人ひとりの個性が生きる（光る）集団づくり」のテーマで学部研究を実施した。筆者が訪問した9月の学部研究会では、集団で行う授業における「子ども一人一人の個性が生きる集団」をどのように考えるかについて活発な意見交換が行われ、筆者も集団で行う授業について進言した。以下が、学部研究会参加者で討議した後に筆者が進言した意見である。

<集団で行う授業づくりについて>

Q：集団で行う授業を組み立てるとき考えることは何か？

A：集団で行う授業に合わせて、子ども一人一人の目標を考えていくのではなく、子ども一人一人の目標に合わせて集団で行う授業づくりを行う必要がある。その上で、特に、集団の授業の中では、展開する授業の全ての場面で子ども達全員の目標を達成できることを考えることはとても難しいので、展開する授業の各場面に応じて、例えばこの場面ではCさんの目標に注目し、次の場面ではD君の目標に着目する等、展開する授業の各場面に応じて、子ども一人一人の目標が十分達成できるような授業づくりをすすめていけると良いのでは。さらに、子ども達がただ一緒に場を共有しているというだけの集団では良くない。子ども同士や同年齢同士、もっと言えば、お互いがふれあって影響し合える集団づくりができるなら、集団で行う授業を展開する意義がある。そのためには、一人一人の子どものことを考えながら、集団で行う授業の在り方を考えていくと良いのでは。

今日の学部研究会での討論を受けて、今後は集団で行う授業についてさらに検討をすすめていくことと、学部研究の成果を今後しっかり示していくことが確認され、この日の筆者のコンサルテーションを終えることができた。

イ 2回目のコンサルテーション

○10月23日（木）

・テーマ「今日の授業について」、「全体研究会に向けて」

① 今日の授業についてのコンサルテーション

<スイッチを使うときの工夫について>

Q：E君がジェリービーンスイッチ等を使用するときの工夫は何かあるか？

A：例えば、机上のどこにスイッチがあるか等を認識してもらうために、スイッチの位置を固定し、スイッチが複数ある場合は、色の違うスイッチを使用する等の工夫をしたら良いのではないか。

Q：教師が提示することに注目してくれているかどうかかわからないが、注目してくれるかを試せるような工夫はないか？

A：例えば、暗い部屋で光る教材に注目するか等を試してみても良いかもしれない。

Q：例えば、子どもが興味をもって遊びに集中しているとき、朝の会が始まるので、その活動を一度中断し、朝の会の活動に移行してほしいと思っているが、子どもの活動を中断するときの何か工夫はないのか？

A：活動を中断することを子どもに伝えるサインや朝の会が始まることを伝えるサイン等もいっしょに子どもに伝えられるようにしていくと良いのではないか。

Q：数と数字のマッチングはできているが、実際に提示した物を数えてもらおうと、数唱と物の個数とが一致しなくなることもある。どのように数字を覚えるといいのか？

A：数字を書いて覚えてみてはいかがか。書くことで覚えることがある。上肢に軽い肢体不自由があり、鉛筆を握って持つことが困難ならば、最初は筆を使ってはどうか。書道なら大きく文字を書くことができ、鉛筆とは違って持つところも少し太い。また、書道の筆を使って字を書くときに、「はらう」、「止める」等をしっかり練習することによって、書くときの力の入れ方等の加減も学ぶことができるかもしれない。数字を覚えるためには記憶に頼った数え方をするのではなく、実際に数字を書いて覚える工夫を試してみてもどうか。

② 学部研究についてのコンサルテーション

約1週間後の全体研究会（全校の教職員で行う研究会）の開催に向けて、その時に今回の全体研究会を担当する中学部として、どのような企画をして会を運営するかについて話し合いを行った。学部としては前回の会議で「集団で行う授業の中で子ども同士が仲間を意識するために」というテーマで討論することを決めたが、果たしてそのテーマで討論することは良いのかが再度話し合われた。

肢体不自由教育部門の中学部としては、子ども同士のかわり合いが大切だと考えているが、他の学部ではそのような場（環境）を大切に考えたり、子ども同士がかわりをもつ場を設定したりしているかどうかを全体研究会で討

論したいとのことである。

特に、自閉症のある児童生徒について、近年の自閉症の教育において、環境を構造化したり、その子が行う活動や役割をあらかじめ決めたりしているが、その子の「個性」を育むことについてはどのように考えるか知りたい等の意見が出ていた。そのようなことを全体研究会の中で討論できれば良いという意見で最後はまとまった。

さらに、「子どもが主体的に動くためにはどうしたらよいか？」ということや、「子どもの『嫌だ』という選択も自己決定の一つではないのか？」という話題について学部研究会の中で活発に討論が行われた。

最後に筆者から、子どもが「実現できない」、「やりたくない」ということを繰り返すことにより、子どもがあきらめてしまう「学習された無力感」の話をし、そのようにならないような子どもとのかかわりの工夫について話題提供を行った。

(2) 高等部におけるコンサルテーション

ア 1回目のコンサルテーション

○6月26日（木）

・テーマ「個別の指導計画、個別の教育支援計画におけるPLAN（計画）の検証」

A特別支援学校高等部では、平成20年度、学部の研究テーマとして、「進路に関わる学習を考える一個々の生徒が目指す卒業後の生活につなげるためには、どのような授業を実践したらよいか」を掲げて研究を推進してきた。

1回目のコンサルテーションでは、この研究テーマに基づき、最初に、知的障害部門と肢体不自由部門2、3年生合同の授業である、就業体験実習を見た。この授業は、今後の生徒の進路にも大きく関係する授業では普段の作業学習のグループを一つのバーチャルな会社に見立てて、そのバーチャルな会社で1日を通して作業を行うという授業であった。食品加工やクリーニング、木工等の様々な作業を見ることができた。

その後、放課後に学部研究会が開催された。ここでは、学部研究の流れの説明を受けると同時に、筆者も個別の指導計画や個別の教育支援計画を立案するとき先生方が疑問に思っている事項等について質問を受けて、それらの質問に答えるコンサルテーションを行った。

以下は、その話し合いの時に出された話題と進言を求められた筆者が述べた内容である。

<授業における個別の指導計画の活用について>

Q：個別の指導計画、個別の教育支援計画のもつ意味とは？

A：個別の指導計画はツールとしての意味を持つ。複数の人がその子の指導に対して複数の目で検討し、その子

の指導をより良いものにしていくためのツールである。

<個別の指導計画の作成に関して>

Q：個別の指導計画の目標の立て方について

A：個別の指導計画の作成は丁寧に行う必要がある。特に、目標については、評価のできる目標を設定することが大切である。また、目標の達成については、目標の達成期間を明確にする等の工夫をすることが必要である。評価から次の目標への立案については、評価を受けて縦にステップアップする目標を立てるのか、横に幅を広げる目標を立てるのかどうかを考えることが大切である。なお、目標を丁寧に立案すると、目標に対する評価がしやすくなる等、その後の作業が楽になる。

<個別の指導計画の目標の共有について>

Q：個別の指導目標を冊子にして、指導の検討会に持ち寄る努力が必要か？学部の生徒を学部の教員で理解していきたいが。

A：担任が欠席等で不在のときに、誰もその子に対して指導できない体制にならないためにも、目標等を学部の検討会に持ち寄って検討していく努力が必要である。また、学部の先生が子どもに対する指導方針を共有していることは保護者にとっても安心感にもつながる。

<教育課程の類型別に分かれた子どもの集団づくりについて>

Q：教育課程の類型別（学年相応、下学年、知的代替、自立活動を主とする教育課程）に分かれた子どもの集団構成を行っているがどうか？

A：教育課程の類型別に分かれた子どもで集団構成をしているが、子どもの状態によっては一担類型別に分かれた集団に組み込まれると、その集団から抜け出すことが容易ではない子どももいる。集団で構成される授業を考えるとときに集団の作り方について検討する必要があるのではないか。そのためにも、一人一人の教育的ニーズは何なのかを考えた集団づくりが必要である。例えば、いつも自立活動を主とする教育課程の生徒で構成されている集団の中で学んでいるFさんが、時には学年相応の教育課程の生徒で構成されている集団の中で授業に参加することによって得られる大きな効果が期待できるかもしれない。そのことをふまえた集団づくりを考えていく必要がある。

<指導の基本方針を打ち合わせる時間について>

Q：指導の基本方針を丁寧に全員で見合う時間がないがどうすれば良いか？みんなで丁寧に検討する大切さは感じているが……。

A：必要性の低い会議を減らす努力をする。また、会議の進行について、慣れてくると効率よく行うことができるようになってくることもある。指導の基本方針を丁

寧に見合う時間はとても大切である。

<個別の指導と集団の授業のバランスについて>

Q：ずっと個別の指導では無理がある。集団の授業でその雰囲気味わうことも大切なのは？

A：集団を構成して授業を行う場合、その集団づくりを丁寧にやる必要がある。教育課程の類型別に構成された集団づくりにとらわれ過ぎないほうが良いのでは。また、逆に、集団の中で生徒自身もつ本当の力が発揮されないような集団の授業であってもいけない。したがって、集団づくりは生徒一人一人の教育的ニーズに応じて慎重に行う必要がある。

<キャリア教育について>

Q：高等部なので、卒業後に向けて指導を行っているがこの方法で良いか？

A：高等部卒業に向けて、出口の部分の進路指導だけでなく、小学部、中学部、高等部全体でどのような力をつけていくのか、学校全体で、その子の将来に向けての教育の在り方、いわゆるキャリア教育について考えていけるシステムを作っていくことが大切である。

イ 2回目のコンサルテーション

○10月2日（木）

・テーマ「個別の指導計画のDO（授業実践）とSEE（評価）、さらにPLAN（次の計画）へ。」

最初に、授業を見た後、放課後に「作業学習」について、A特別支援学校肢体不自由教育部門高等部が抱える課題とより良い改善のための話し合いがもたれた。

話し合いの中では、知的障害教育部門が主に実施している「作業学習」の中に、肢体不自由教育部門高等部の子ども達が入っている現状が報告され、授業の評価等に関して、いかに肢体不自由教育部門に合致した評価や、授業への参加の仕方があるのかを学部研究会に参加した全員で検討した。

そこで、肢体不自由教育部門の教育課程について、他の障害種の部門との関連性も含めてあらためて見つめることを目的に、筆者が教育課程について話題を提供した。また、そのあとに、「作業学習」についての活発な討議がなされた。提供した話題は以下の通りである。

- ・「作業学習」は教科等を合わせた指導で、知的障害のある生徒に教育を行う特別支援学校の授業でよく行われている。
- ・知的障害教育部門で実施している「作業学習」の時間に参加するかどうかは、肢体不自由教育部門の生徒一人一人の教育的ニーズに合わせて検討する。また、どの作業

種に参加するのも、個別の指導計画に基づいて考えていく必要がある。

- ・同様に、生徒一人一人の障害特性をふまえた上で、学習内容を考えていく必要がある。
- ・教育課程の類型をベースにして集団づくりを行うと、個々のニーズに対応できなくなる可能性もある。むしろ、集団づくりのベースになるのは、個別指導計画をもとにその生徒にふさわしい集団を構成することが大切である。
- ・実際の「作業学習」では、肢体不自由教育部門に所属している子どもの特性である肢体不自由ということに配慮した授業づくりを行うことが大切である。また、指導内容も個別の指導計画に対応できる内容を用意することが大切である。
- ・「作業学習」を考えるときに、自立活動を主とする教育課程の生徒にその授業では何をねらうのか、つけたい力は何なのかを検討し、作業の内容も考える必要である。
- ・知的障害教育部門が中心で実施している「作業学習」の評価シートについて、肢体不自由教育部門の子どもの特性である「身体の動き」等にも配慮、考慮した評価項目を考慮することが重要である。
- ・なお、肢体不自由教育部門では、教育課程の類型で、学年相応、下学年適用、知的代替等、さまざまな発想からその子にあった授業を考えることができるメリットがあり、それらをうまく活用して子ども一人一人の教育的ニーズに応じた授業を展開していくことを考える必要がある。

このように、学部研究会では、肢体不自由教育における教育課程について筆者が話題提供することで、あらためて肢体不自由教育について見つめ直してみることににより、学部研究の参加者から様々な意見が出て活発な討議ができた。また、学部研究終了後に、テーマに基づき、活発な意見交換と教育課程に関する研修ができたという嬉しい感想ももらった。

ウ 3回目のコンサルテーション

○12月18日(木)

・テーマ「個別の指導計画のDO(授業実践)とSEE(評価)、さらにPLAN(次の計画)へ。」

はじめに、授業を見て、その日の放課後に1年生の「進路学習」の授業について学部研究会で検討を行った。検討する項目として、一つめに生徒一人一人の教育ニーズから出発したか、二つめに目標が達成されたか、そして課題は何なのかを明らかにすることにした。また、次年度の「進

路学習」の方向性についても学部研究会に参加した全員で検討を行った。

ここでのコンサルタントとしての筆者の役割は、そこで「進路学習」の授業で討議された事項について意見を述べることである。具体的には、学部研究会の参加者で討議された意見を受けて、以下のような意見を述べた。

- ・現在ある授業の「基礎」や「進路学習」という授業の名称、授業形態等が混在しているので、少しわかりやすく整理していく必要があるかもしれない。
- ・「進路学習」等は、「総合的な学習の時間」の中で取り上げて良いのでは。
- ・「進路学習」の授業の様子のVTRはとても良かった。それは、この授業が、特に生徒自身が考えたり、生徒自身がふり返りを行っていたりするところが良かった。まさに、「総合的な学習の時間」として考えてもでも良いのではないか。
- ・将来の進路に向けてどのような力をつけたいのかについてももう少し考える必要がある。例えば、将来に向けて、最後までがんばる力を育てていきたいのか、人間関係形成能力をつけていきたいのか、環境へ適応する力、協調性をつけていきたいのか等である。
- ・日常の授業について、生徒のキャリア発達についても考えていく必要がある。
- ・さらには、教育課程上で知的障害の各教科との関連性についても考えていく必要がある。
- ・将来に向けてどのような力をつけていくのかは、高等部だけで取り組むだけでなく、小・中・高、それぞれの教育活動の取組の中で検証していく必要がある。
- ・さまざまな子ども達が特別支援学校へ通っている現状がある。そのことを考えると、子ども一人一人の教育的ニーズをしっかりと見据えることが大切である。そして、その基本は個別指導計画をしっかりとふまえることでもある。

このような形で、「進路学習」については、内容・方法等に工夫を加えて、今後も継続して行う授業として学部研究会参加者全員で検討し、参加者全員で確認することができた。

4 子ども一人一人のニーズに応じた授業を展開するために

平成20年度、自分自身がA特別支援学校へ行った学校コンサルテーションをふり返ると、先生方が日々不安に考えている事項や疑問に思っていることに対する確かな進言ができたかどうかの反省すべき点は多々ある。しかし、実際

に先生方と話し合いを持つ中で、先生方自らが日々の授業や子どもたちへの指導の中で悩んだり、考えていることについての話題を引き出し、子ども一人一人の教育的ニーズに応じた授業を展開するための方策について、子どもにかかわる学部の先生方でアイデアを出し合い、課題となっている事項について整理、検討し合い、指導の方針を共有できるように働きかけることができたことは良かったと思う。

学校の中では、子どものことについて話し合う場がたくさんあるが、現状としては、話し合いの場で、それぞれが担当している子どものことについて、教師同士がふみ込んで意見を交換することはなかなか容易ではないと聞く。例えば、担当者に同じ意見を伝える場合でも、立場の同じ同僚が伝えるよりも、立場の違う人や外部から進言することのほうがずっと相手に伝わりやすいということもよく聞く。外部から講師を招聘することによって、改めて自分たちの教育方法や内容について、教師が自分の実践を振り返る良い機会にもなるそうである。

今年度A特別支援学校へのコンサルテーションを進める中で、教師が子ども一人一人のニーズに応じた授業の展開について、日々たくさんの悩みがあることをうかがえた。その内容は、個別の指導計画の立案の仕方や教育課程について等のどちらかというとハード的な側面と、実際の授業

や子どもへの指導法についてのソフト的な側面の両方があった。特別支援学校の教師は特別支援教育に関する高い専門性を兼ね備えていると考えられているが、そのような立場にあってもまださまざまな悩みや日々疑問に思っていることがまだ多く解決されていないことも推測される。

今後は、これらの教師の悩みや日々の疑問に対して、今よりももっと身近にそして気軽に解決できる相談システムの構築を図ることが求められている。学校コンサルテーションがもっと気軽に活用できる態勢を整えることが、そのことに対する解決策の一助になるかもしれない。

参考文献

- 1) 独立行政法人国立特殊教育総合研究所：「学校コンサルテーションを進めるためのガイドブッカーコンサルタンと必携一」、課題別研究「地域の支援をすすめる教育相談の在り方に関する実際的研究」報告書、2007
- 2) ウイリアム・P・アーチュル、ブライアン・K・マードネス著：大石 幸二監訳：「学校コンサルテーションー統合モデルによる特別支援教育の推進」、2008
- 3) 加藤 哲文、大石 幸二編著：「特別支援教育を支える行動コンサルテーション 連携と協働を実現するためのシステムと技法」、2007